

山本 登朗

『古今集』仮名序に「歌の父母」と記されている「なにはづ」「あさかやま」の両首が、滋賀県甲賀市の宮町遺跡（紫香楽宮跡）出土の木簡の表裏に一首ずつ墨書されていることが判明し、その記事が各新聞（5月22日）の一面を飾った。記事のことはを借りれば、「2首を（歌の）手本とする考え方は（『古今集』仮名序の）150年前（紫香楽宮時代）から存在していた」ことになり、『万葉集』時代と平安時代の和歌の関連を考えるうえで、この木簡は、その表記も含めてきわめて注目される。これをめぐって早速シンポジウムも開かれていたが、上代の側からのアプローチがほとんどで、平安時代側からの検討が遅れているように見えるのは残念である。

これに先だつて、平安時代における『万葉集』歌の享受について、また新しい発見が報告されている。新沢典子「古今和歌六帖と万葉集の異伝」（『日本文学』1月）は、『古今和歌六帖』所収の『万葉集』巻十二の歌について、『万葉集』で異伝注記のある歌が古今六帖に含まれる場合、すべて本文歌ではなく異伝歌が採られている「事実を指摘し、そこから「古今六帖の編者の見た万葉集は、少なくとも巻十二に限っては、いま見る歌集とは異なるものであった」という結論を導く。そしてさらに論は『伊勢物語』に及び、「伊勢物語の参照した『万葉集巻十二』も同様に、「現在異伝として断片的に残る歌を含んで成り立つ歌巻であったのではないか」と述べる。地道な作業をふま

える労作だけに、その提言には迫力があり、今後の展開がたのしみである。

「歌の父母」ならぬ「物語の親」とされる『竹取物語』について、静永健『竹取物語』は何処から来たか（『アジヤ遊学』106・19年12月）は、さまざまな点から「白楽天詩の（濃厚な）影響」を指摘する。刺激的なタイトルだが、『竹取物語』の淵源ではなく、「素材となった漢籍の中で、最も年代が新しいもの」として『白氏文集』をあげ、『竹取物語』もその影響下に成り立っていることを指摘する論調はむしろ穏健である。同誌同号掲載の仁木夏実『新撰万葉集』と唐代伝奇小説』は、『新撰万葉集』の漢詩の読解の試みから、白居易周辺の人物・李公佐によって作られた唐代伝奇『南柯太守伝』がその典拠となっていることを明らかにした好論。これによれば『南柯太守伝』の伝来と受容はきわめて早い時期から行われていたことになり、中国の当代文学がほぼ同時代的に受容されていた当時の様相が、そこからはうかがわれもする。

新聞と言え、京都・島原の角屋で、『源氏物語』末摘花の別本本文を持つ鎌倉写本が発見されたことが大きく報道され、話題を呼んだ（3月11日）。さらに7月には、ながらく行方不明だった「大沢本」五十四帖の現存が伊井春樹によって報告され、特にそのうち二十八帖が別本であることが注目された。新聞にもあるように、最近では別本の「新発見が相次ぐ状況」だが、この両本の出現は、今年が

『源氏物語千年紀』であることと無関係ではない。貴重な伝本がこの機会に姿を現し、それが世間の大きな話題にもなっているのは、まことに喜ばしいことである。

『千年紀』はいよいよ、『紫式部日記』の記事当日の十一月一日を迎えようとしていて、今後一層の盛り上がりが見込まれる。それにあわせて一般読者も対象にした『源氏物語』関係の著書の出版もあいついでいるが、それらは本誌八月増刊号の原岡氏の時評に詳しく紹介されているので省略し、ここでは紫式部顕彰会の千年紀記念事業として刊行された『源氏物語と紫式部―研究の軌跡』（同会編 角田文衛・片桐洋一監修 角川学芸出版 7月）を紹介しておく。同書は、島津久基から石田稷二まで「昭和の源氏物語研究史を作った十人」についての評伝、および「研究論文からみる源氏物語と紫式部 研究の諸相」と題された四十篇の論文解説からなる「研究史篇」と、その四十篇の論文を収録した「資料篇」の二冊からなる。五十人におよぶ執筆による論評はそれぞれ個性的で、研究史をめぐる読み物としても興味深い。紫式部顕彰会の会長として本書を企画した角田文衛は、刊行前の五月十四日に九十五歳で世を去った。千年紀記念の展覧会が開かれた京都文化博物館の前身である平安博物館の設立など、学問研究の世界に留まらない幅広い活躍は、人々の記憶に長く残るであろう。なお、同様の研究史集成として、『テーマで読む源氏物語』

（三巻 今西祐一郎・室伏信助監修 上原作和・陣野英則編

勉誠出版）の刊行も始まっている。

『千年紀』は研究者だけでなく、より広がりのあるイベントとして成功しつつあるが、それだけにそこではかえって、『源氏物語』がことばによって作り上げられた世界であることが忘れられがちである。本廣陽子『もの』形容詞の意味と用法の発展―源氏物語の果たした役割―（『国語国文』6月）は、接頭語「もの」が付く形容詞が『源氏物語』で大きな変化と発展を見せ、それによって「豊かな深みのある」作品世界が成立していることを、緻密な読解と分析によって明らかにしている。中川正美「源氏物語の人間関係―「はづかし」に見る種々相―」（『源氏物語の展望』第三輯 3月）は、『源氏物語』における「はづかし」の用法の特異性に注目し、「人間の心の幾々に分け入って細やかに描写していく」その表現を登場人物の人間関係に即して分析する。ともに、「千年紀」で忘れられがちな『源氏物語』そのものに迫る試みと言えよう。

斎藤菜穂子『蜻蛉日記』と私家集との近さ―和歌から二下げ表記に着目して―（『日記文学研究誌』10 3月）は、現存する主要伝本の書記形式から『蜻蛉日記』上巻に内在する私家集的性格を探ろうとする。特異な観点の論だが、伝本をありのままに見ようとする姿勢は重要である。今後の展開を注目したい。